

---

○議長（稲葉昭宏君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前 10 時 55 分）

---

◇ 長 嶋 精 一 君

○議長（稲葉昭宏君） 一般質問を続けます。

通告順位 2 番、長嶋精一君。

（3 番 長嶋精一君 登壇）

○3 番（長嶋精一君） 公僕という言葉がございます。この意味は、三省堂の国語辞典によりますと、「国民に奉仕する者としての公務員の称」小学館の国語辞典によりますと「社会に奉仕する人の意味から公務員のこと」と書いてあります。つまり役場の職員はまさしく公僕であるわけであります。

私は、ある職員にあなたは公僕という意味を知っていますかと尋ねたら、知らないというわけですね。私は愕然としたというよりも、あきれたわけであります。松崎町職員としての私の役割はこうですと、責務はこうなっています、使命はこうでありますと、いくら声高で言ったとしても、根っこの部分で公僕という意味を理解していなかったら、話にはならない、空虚に響くわけであります。単に目の前にある仕事を忙しそうにさばいていく、パソコンの前にずっと座って、ひたすら操作をやっている。それで仕事をやっているというふうに思ったら大間違いだと私は思うわけであります。自分のやっている仕事が直接社会に、町に奉仕をしているんだというその意識がなければ、私は公務員ではないというような矜持、プライドを持ってもらいたいと思っているわけであります。

私は、なにも職員に対して自分を捨てて、大切な自分の家族を捨てて、それまでして社会に、町に貢献してもらいたいと言っているわけではないんですね。ただ、自分のことだけ、自分の家族のことだけ、自分の係のことだけでは困ると言っているわけです。

職員は社会のこと、周りのことについても強く関心を持って、行動を伴った社会奉仕をしてもらいたいと思っているわけであります。

町長は盛んに職員をほめるわけですが、公僕という意味を知らない人がたくさんいるわけであります。ぜひ理解をさせて、それが行動となって現れるようにしっかりと教育をしていただきたいと思っているわけであります。

今日は3つの質問と要望をいたします。一問一答でお願いします。

まず、第1でございます。町長は、6月定例会で人口減少等による大幅税収減という厳しい環境下においても松崎町は単独でやっていくと述べたわけですが、その理由を説明していただきたいと思います。

確かに1市3町の合併構想は5～6年前にとん挫したわけであります。ちょうどそのころは平成の大合併という嵐が吹き荒れていたわけなんですね。合併は失敗したという市町と成功したという市、町は当然あるわけであります。失敗の原因を私は考えますと、そもそも合併したらどのような町をつくるかというビジョンがなくて、まず合併ありき、極端なことを言いますと、合併特例債というエンジンを目の前にぶら下げられて、それに乗ってしまったという合併はほとんどが失敗していると私は思うわけであります。

10年経過して合併特例債の恩恵がなくなって、さあ、困った。大変だと言っても一番困るのは住民であります。民間企業の例えば合併をする場合はどうするかといいますと、今後の10年間の計画をしっかりと立てて、工程表を作り、その工程表に基づき計画実績を綿密に精査し、万が一かい離があった場合は、その都度原因を追究し軌道修正をしていく、そういうことを経て成功していくわけであります。それから、計画といっても役所の場合は、計画は立てやすいんですね。なぜなら、少なくなっているといっても、減収しているといっても税収は必ずあるわけです。それから、地方交付税も必ずもらえるわけです。ところが民間の場合は、様々な経済の変化によって明日の売上もわからない。予定も読めないということがよくあるわけであります。

町長、合併構想は立ち消えになったわけですが、以降、単独でやってきているわけであります。振り返り現実はどうでしょうか。

さて、人口減少に関連して言いますと、昨年の中公論の6月号で増田元総務大臣とそのグループである日本創成会議が消滅する市町村という非常にセンセーショナルな論文を発表したわけであります。その消滅可能な市町に残念ながら、わが町は入っているわけですね。そして、この人口減少問題については、増田元総務大臣のグループだけが言っているんじゃないで、いろいろな経済学者等が指摘をしていたわけであります。

特に、5～6年前日本政策投資銀行の出身である藻谷浩介氏というエコノミストは、デフレの正体という本で強く警鐘を鳴らしていたわけであります。このようなマクロの経済環境をしっかりと把握しながら、わが町も現実的に即して照らし合わせ、どう対処していくか、これ

を対処していくことがまちづくりには不可欠だと思うわけであります。

ところで、いま松崎町で人口減少によって起きている現実問題について言いますと、空き家が増加している。空き店舗が増加している。耕作放棄地も増加している。かたや、税収は減少している。民宿の数も大きく減っている。事業所数も減っている。小売店販売額も減少している。不動産価格も下落していると・・・。

特に、東日本大震災以降、海岸付近の不動産というのは、大きく下落しています。しかも買い手がなかなかみつからないという状態であります。まさに負のスパイラルに陥っているわけであります。だからこそ、いま町は何とか移住者を増やして、松崎町に住んでもらいたいという運動を展開しているわけであります。

しかし、私から見ると、運動をやっている。体制は作りましたといくら言っても機能していない。ワークされていないと思っているわけであります。2～3年前に体制を作ったという空き家バンク、空き家バンクでございしますが、まだ登録がゼロだというふうに聞いております。

公務員はそもそも競争がないんですね。数値目標を与えられ、それを達成しようという概念がないわけです。できなかったら、できなかったで仕方がないじゃないかと、これではほとばしるような知恵が出ないわけです。

どうして民間人、これはリタイアした人を含めて、こういう方々に参加してもらい、その力、知恵を借りようとししないのか、私は大いに疑問であるわけであります。

町長、この点についても答えていただきたいと思います。

私は、6月定例会でご意見箱の設置を要望しました。これについては、議長、関連でございますので、お許してください。

もう3カ月経つわけですが、町は現在どういうふう to 実施するかを検討中だというわけがあります。行政には、前向き3年、検討10年。前向き3年、検討10年という言葉があるそうですが、それでは困るわけであります。

私はご意見箱というのは、苦情だとか、クレームだとか、あるいは行政批判ばかりではないと思っているんです。なかには耕作放棄地をこうしたらいいんじゃないかと、空き家はこうやって少なくするべきだとか、あるいは地方創生はこうやるべきだという前向きな建設的な意見もきっとあると思っています。

町は、8月初旬に地方創生に関するアンケートを約200名くらいの方々に抽出してアンケ

ートを取ったそうです。早くご意見箱を設置しておけば、もっと幅広く地方創生等の意見が取り入れられたのではないかと考えております。

○議長（稲葉昭宏君） 長嶋君、ちょっと申し上げます。前段では通告してある質問だけにしてください。自席に戻って、着席したときに一問一答でやっていただきたいと思います。

○3番（長嶋精一君） はい。わかりました。

私はこの得られるべき収入が得られなかったという、一種の逸失の利益に近いと考えております。

それでは、今までのことについて、町長に質問をしたいと・・・。

○議長（稲葉昭宏君） 通告をした部分の質問を前段でしまして、これは通告してありますから、一旦自席に戻ってから。

通告の部分は町長の方で答弁します。そのあとで、一問一答で質問していただきたいと思います。

（長嶋議員「わかりました」と呼ぶ）

○議長（稲葉昭宏君） 一応前段が終わりましたら、自席に戻っていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○3番（長嶋精一君） 関連でございますので。

○議長（稲葉昭宏君） 関連も自席に戻ってから一問一答でやっていただきたい。

○3番（長嶋精一君） わかりました。

○議長（稲葉昭宏君） 通告してありますから、一応通告してあるから、町長の方で通告の部分についての答弁をしてください。

（町長 齋藤文彦君 登壇）

○町長（齋藤文彦君） 長嶋精一議員の一般質問にお答えします。

1. 松崎町の将来について。「町長は6月の定例会の時、人口減少、税収減少という厳しい環境下においても、松崎町は単独でやっていくつもりと述べましたが、その理由をお聞きしたい」についてでございます。

地方分権や少子高齢化の進展に加え、生活圏の拡大や厳しい財政状況などを背景として、基礎自治体の財政基盤を確立させるという目的で、平成11年から国は全国的に市町村統合を推進しました。その結果、3200余りあった市町村は約半数にまで減少しました。その後、平成22年に合併特例法改正法案が提出され、全国的な合併推進に一区切りがつけられました。

合併の評価はいろいろな団体で検証されていますが、行政的な見地からは「住民サービスの提供体制が充実強化された」「広域的なまちづくりができる」などの良い面も挙げられますが、住民サイドからは、「周辺部の旧市町村の活力が喪失した」「住民サービスが低下し声が届きにくい」「旧市町村の伝統文化が喪失した」など課題も多く挙げられ、必ずしも合併の恩恵を住民が得ているとは言えない状況にあると思います。

当時、当町でも合併の議論がされましたが、結果的に単独の道を選択するということになり現在に至っています。置かれている環境は、前にも増して厳しい状況と言わざるを得ませんが、こうした中でも私は、松崎の良さをいかしながら、いかにして生き残っていくのかを考え、平成の花とロマンのふる里づくりをテーマとして、小さくとも自立した町となるよう、町政を進めているところでございます。

今後、単独でまちづくりを進めていく中では、近隣市町との連携を図ることは必要であり、強化していきますが、先に述べたとおり合併後に活力を失い、また住民サービスが低下したなどの問題もありますので、小規模自治体の持つきめ細やかさをいかしながら、住民と連携したまちづくりを進めていける現在の状況がいいのではないかと考えています。

2. 伊豆まつざき荘について。「伊豆まつざき荘の管理運営は、松崎町振興公社であるが、経営主体はあくまでも松崎町であるはず。平成21年から6期連続赤字状態。町長は、松崎町振興公社の理事長も兼ねており、その経営責任は非常に重い。今後、どう対処していくつもりか、お聞きしたい」についてです。

伊豆まつざき荘は、地元雇用の拡大や地元仕入れへの貢献、観光の尖兵として役割を担うことを目的に昭和39年に開業し、以来、地域経済の活性化に大きな役割を果たし、過去においては一般会計に2億600万円余を納付するなど財政的にも大きく貢献してまいりました。

伊豆まつざき荘は、平成18年にリニューアルオープン後、松崎町振興公社を指定管理者として、第1期として3年間、第2期として5年間管理を委託してきたところでございます。

第3期目となる平成26年度からの指定管理者を松崎町振興公社に再委託することにつきましては、議会でも色々のご議論をいただいたところでございますが、地元雇用や地元仕入れ、町のシンボリックな施設、町民の施設としての対応、グリーンツーリズムの先導的な施設としての展開を考えたときに、松崎町振興公社に委託することが最善の策として、私の任期中である3年間の指定管理の期間としてご了解をいただいたところでございます。

平成26年度の決算では、宿泊利用者数1万9777人で前年度より1117人増となり、赤字も

1600万円余り改善しております。行政報告でもご説明いたしましたとおり、平成27年度の7月末の宿泊客数は、前年度比で756人増となっていることから、今後も伊豆まつぎ荘の現状分析を続け、町と振興公社が強力にタッグを組み、コスト削減に努めるとともに様々な企画を展開し、一刻も早く黒字になるよう全力をあげて取り組んでまいりたいと思います。

3. 福祉小型（循環）バスの運行について。「沼津方面の病院に通う人のために、東海バスの松崎始発に間に合うよう、各地区にて福祉小型（循環）バスの運行を要望する」についてでございます。

地元のかかりつけ医や、隣接市町の病院では対応できない疾患がある方で沼津方面の病院に通院している方は概ね280人以上いると把握しています。

その中で自家用車を所有していない方はバス利用になりますが、朝5時5分の始発バスで通院することは体への負担が大きく不適當かと思われますし、殆どの病院の診療開始時間が午前9時であることを考えると始発にこだわる必要もないため、今の時点では始発前の循環バスを運行することは考えておりません。

しかし通院にかかる所要時間や乗換等の不便さを考えると何らかの対応が必要と思われますので、南伊豆を発車、河津を経由して伊豆の国市の総合病院に直通しているバスがありますので、松崎町民が修善寺出口停留所から乗れるよう、関係機関と調整を始めたところでございます。

以上です。

○3番（長嶋精一君） 一問一答でお願いします。

○議長（稲葉昭宏君） 許可いたします。

○3番（長嶋精一君） 町長は単独でやるということでございますが、関連でございますので、私は、私なりの考え方を述べてまた町長に質問したいと思います。

○議長（稲葉昭宏君） 許可します。

○3番（長嶋精一君） 賀茂は一つという概念、言葉がございます。そういうことから、例えば、1市4町、東伊豆町を除いて、下田、河津、西伊豆、南伊豆、松崎町、この合併で、これを仮に下田連合と呼びます。合併すると仮定して、下田連合と言います。この下田連合と比較して説明する町を周辺にある袋井市、これと比較いたします。袋井市の人口が8万5000人、職員の人件費が46億円、下田連合の人口は6万人、これは袋井市の人口よりも約2万5000人少ないわけであります。にもかかわらず。職員の人件費は47億円、2万5000人人口が

少ないということをわかりやすいイメージでとらえると、下田市の人口がそっくりないというふうにと考えるとわかりやすいと思います。人口は少ないんだけど、職員の人件費は多いという・・・、そこで、仮に袋井市の人口、職員の人件費の割合が適正水準だとした場合、下田連合の修正人件費を求めると、32億円になるわけでありまして。実際は47億円、これが修正すると32億円、人件費の削減が15億円になるわけでありまして。これを机の上の空論だと、机上の空論だと思わないで、原点に返って考えた方がいいと思うわけです。

人口減少時代というのは、イコールお金が不足する時代です。お金がなくなる時代であります。生きていくためには、ロマンもお金も大切なんです。あの有名なチャールズ・チャップリンは、夢と希望とお金があれば生きていけると言っているわけでありまして。物心両面が必要なんです。10億円以上の人件費が削減できるということは、それだけ新たに使えるお金が生まれるということでありまして。このお金をもってして、観光対策、農林水産対策、災害対策、医療福祉対策に充てるということの方が住民にとってよほど有益ではないかと思うわけでありまして。

それから、さらに湖西市というのが、浜松の近くにあります。ここの人口も6万人、ここも下田連合と同じような規模でありますが、職員の人件費が42億円とやはり5億円下田連合よりも少ないということでありまして。

私は合併のキーワードとして、自主的合併、国や県の指導ではない。おれたちの町はおれたちが作るんだというその強い気概をもってやっていくということ・・・。

それと、合従連衡。小さい町同士が結集をして強い相手と戦う、あるいは問題を解決していくということ・・・。下田連合の循環型社会を作る、自給自足を作るということ、外からのお金はあくまでも観光を主体とした農林水産、観光業と一体推進であります。

単独でいくにしても、1市4町の合併をするにしても、あるいは西伊豆町の合併をするにしても、私は、役場の組織を徹底的にスリム化する必要があると思います。なぜなら、今の組織は、経済がなだらかに成長して人口が増えるという、相当昔からのなごりをただ踏襲しているわけでありまして。時代も大きく変化しております。

それと私は、役場の仕事というのは、公務員でなければ、できないという仕事はほとんどないと思っている。習得すれば、習練すれば誰でもができるようになると思います。従って、スリム化するためには、原点に戻って、その仕事は本当に役場がやらなくてはいけない仕事なのか、民間にできないのかという観点から、見直す必要があると思います。

そして、住民の皆さんもなんでも役場にやれやれというんじゃなくて、自分たちでできることは協力し合って自分たちでやっていきたいと思いますという意思がこれからは大切ではないかと思います。なぜなら、役場にやってもらうということは、それだけ職員が必要になるわけなんです。人件費がますます増えるということでございます。人件費は住民の皆さんの税金がもとでございますので、最終的には、自分の首を絞めてしまうということになるわけでありまして。そうはいっても、住民の中には、自分ではどうしてもできないという方がおられます。そういう方に対しては手厚く対応をすることは当然必要であると思うわけでありまして。

現在、そしてこれからも縮小社会です、縮小社会。これを乗り切っていくためには、似たようなもの同士が、町同士が都会からの移住者を奪い合うような争奪戦を展開するより、小さい町が結集し合従連衡していくことが住民にとってもこれからの子どもたちにとっても幸福であると私は信じて疑わない・・・。

○議長（稲葉昭宏君） 申し訳ありませんが、長嶋君、町長の方の答弁がありますから、答弁が、あまり多岐にわたりますと、答弁もなかなか適切な答弁ができないと思いますから、質問の方へ移ってください。

順次はつきりと説明をしていかないと、町長の方も答弁がちょっと・・・それで、質問に移ってください。

○3番（長嶋精一君） 合併構想がとん挫して、今まで単独できたわけですが、振り返り、現実には、町長、どうでしょうか、これが一つ。それから、もう一つは・・・。

○議長（稲葉昭宏君） いいんじゃないですか、それで、順次どんどん質問は結構、何回でも結構ですから。

○町長（齋藤文彦君） 松崎が単独でいくことになったのは、町民の代表である議員の議決で決まったわけです。それで、松崎町は単独でいくということになったわけでございます。

私は、平成の花とロマンのふる里づくりは松崎らしい田舎づくり、人づくりだということでまちづくりを進めてきたわけですが、まちづくりの施策としてグリーンツーリズム推進協議会とか、歴史的景観整備事業、鰻絵のまちづくり推進事業、若者のまちづくり推進事業、花の咲くまち推進事業というのを進めてまいったわけですが、その中で、松崎町と同じようなまちづくりをしている「日本で最も美しい村」連合というのがございまして、この「日本で最も美しい村」連合の最終目的というのは、ゴールというのは、加盟町村が消滅可能自治体から脱却して、持続的に存続すること3つの戦略、住民の自主的活動、経



済的自立、世襲財産、これは地域の財産ですけれども、この3つを使って経済的に自立することと、松崎町と同じことをやっているなということで、この中に入って切磋琢磨しようと思ってやってきたわけであります。

それで、今回も職員の研修を含めて、11のグループに分かれて、先ほど言いましたけれども、各「日本で最も美しい村」連合の市町に研修に行っているわけですが、こういうことをやって、松崎を活性化していきたいなと思っているところでございます。

○3番（長嶋精一君） 日本一の美しい村というのは非常に結構なことですが、いろいろとやっていることが例年どおりの繰り返しではないかと思うんですね。そして、ずるずる、ずるずる悪くなっているような感じがするわけです。ゆでガエル現象というのがあるんですが、今まさにそのゆでガエルの状態ではないかと思うんですね。温かい適温のプールの中にかえるを入れると寝てしまうと、それにどんどん火をくべて熱湯にしていくとゆでガエルはそのまま死んでしまうという、大げさにいうとそのような状態になってしまうんじゃないかと私は懸念しています。

小さな村宣言というのも町民がどれだけそれに向かおうじゃないかという意識をいかに高めていくか、これが非常に肝要なことだと思います。

合併問題が去ったあと、それから私は・・・、他から見た場合、町の人間だけでなく、お客様、都市部、よその町、松崎町に来てくださるお客さんから見てどうなんだと考えた場合、私は意外と賀茂は一つだと思っているのではないかと考えているんです。

それと、松崎町の文化というのは、確かに、ほかに比較して誇れるところは確かにあります。しかし、西伊豆町だってあるし、南伊豆町だってあるし、河津町だってある。私はそういうふうに思います。ぜひ大局的な考え方で、今がどうだということではなく大局的なことで将来のことをぜひ運営していただきたいと思います。一番最初の質問はこれで終わります。

次のまつざき荘について質問をいたします。昨年一般会計等から金融機関の借入を借り換えをして、毎月の返済額を減らしたわけです。これは資金繰り上やむを得ないと思っております。ただしこれも対症療法で根本治療ではないわけです。なぜならば、毎月の返済額を減らすということは、それだけ返済期間が長くなるわけです。当初約20年間の返済期間がこれによって約30年間になっているわけです。ご承知のとおり旅館等は装置産業であって、15年以上経つと相当傷んでくるわけです。したがって改修資金が必要になるわけですね。15年、

20年経つと。改修資金も必要だし、まだ返済が続いているというダブルパンチが予想されるわけであります。

先ほど4月から7月までの4カ月で経営改善計画で400万円改善されたと言っておりますけれど、結局赤字であるわけです。売上は増えたけれども経費も増えたということで、赤字が1300万円ということであります。しかし400万円は経営改善されたというコメントが載っております。私は、これは本当に自己満足あるいは身内同士のもたれ合いではないかと思っております。経営改善計画は、松崎らしいおもてなしというのが改善計画と聞いております。これを聞いて私は驚いたわけであります。経営改善計画というのは、黒字化するぞという1点だけではないんですか。町長、いかがですか。

○町長（齋藤文彦君） まつぎき荘の今年の計画は、2万1700人を是が非でも達成したいなと思ってやっているわけでございます。それでいろいろなことをやっているわけですが、私はまつぎき荘を・・・、いつも言っていますけれども、グリーンツーリズムの総本山にしたいなと思っています。私と同じような考えで旅館を営んでいる人がいるわけですが、その人は、朝宿泊客のお客さんと自分の山林を散策しながら、カブトムシとかクワガタを見たり採ったりして、そして帰りに自分でやっている無農薬の農場へ行って、そこで作っているものを食べたり、朝の食卓に出たりする。また、昼間は海に行ったり、川に行ったり、その遊び方を教える。夜は、地域の歴史の話をしたり、また地域でやっているいろんな行事に参加する。これは旅館でやればある程度できると思いますけれども、民宿とかなんとかでは体験メニューというのはなかなかできないわけで、その体験メニューをそれぞれの得意分野の人が固まって、ジオパークの人はジオパーク、農業の人は農業、海の場合は海の人、山の人は山の人ということでグループを作ってそれなりの対価を求めれば、私は、そのまつぎき荘に泊まった人が私はこういう体験をしたいなと、じゃあ、これこれに電話すれば、いくらいくらでこういうことをやってくれますよと。このような形にして、全町まるごとふる里自然体験学校、体験を通して対価を得る、教師は町民であると言っているわけで、このような形が松崎町として、私は、松崎町として一番の理想ではないかと思って進めているところでございます。

これ以外にもいろいろあるわけですが、松崎町に、またまつぎき荘にお客さんを呼ぶことがまつぎき荘のためになると思っていますので、それに合わせて一生懸命やっているところでございます。

○3番（長嶋精一君） 町長のお話の方があったものですから、それであっても、6年連続で赤字状態が続いているという実態があるわけです。

そこで、私は議員として、松崎町営宿泊施設整備運営委員会という非常に長い名称の委員なんです。これはまつぎ荘の運営委員会の委員ということですが、疑問に思うのは、4月から担当して半年近く経つんですが、収支状況表の説明というのが全くなかったんですね。民間企業ですと、3カ月にいっぺんの必ずの説明が・・・、連続赤字企業、6年連続赤字企業ですから、毎月あってしかるべきだと思うわけです。いろんな説明に基づいて、角度を変えて各委員が議論をしていい形になっていく、これが常識的なやり方だと思います。

まつぎ荘は税金で運営されているわけですから、特に透明性が必要だと思います。どうして収支説明をやらないのか。これが一つ、質問でございます。そして、もう一つは、我われ委員の役割、使命というのはなんですか。どことどこまで踏み込んでやってよいという役割があるんですか。お聞かせ願いたいと思います。

○町長（齋藤文彦君） これは、議会じゃなくて、委員会の中でぜひお願いしたいなと。あとは課長が答えます。

○企画観光課長（山本 公君） 当然まつぎ荘が議会に提案する議案について審議をいただきますし、まつぎ荘の改善に向けた提言、ご意見を賜るのも委員会のわけでございます。

先ほどおもてなしが経営戦略だよみたいなことがあったわけですが、そうではなくて、まつぎ荘としても年間計画をいろいろ立てておりまして、その中で、いかにお客さんに来ていただくかというようなことを目標にいろんな施策をやっているところでございます。グリーンツーリズムの体験メニューですとか、あるいはエージェントへのセールスとか、あるいは共済の関係のセールスですとか、可能な限り企画を立てて、そういったもので営業努力をしているということの中でございます。

当然黒字を目指していかなければならないというようなことは認識しております。それに向けてまい進しているところでございます。

○3番（長嶋精一君） 委員会でということですか。役割、使命というのについては、それではどのように考えて、我われに期待しているのはどういうことでしょうか。赤字をなくする、黒字化するということは、我われが意見を出してもいいと、そういうことですね、当然。町長、どうでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） 本当に委員会の中で、黒字にするためにこうしたらいいだろう、ああ

したらいいだろうという意見をぜひ出していただきたいなと思うところでございます。

○3番（長嶋精一君） 私は、このまつぎき荘については、相当これはテコ入れを入れなければ、黒字化できないと思っています。

そして、立て直す方法として、1、指定管理者に対して厳しく対応を迫るということ。2つ目は、指定管理者を変えていく。3つ目、役場が直営する。あるいはコンセッション方式を導入するというふうな、このようないろいろな考え方があると思いますけれども、町長、何か検討していることがございますか。ご意見を聞きたいですが。

○町長（齋藤文彦君） 1年前に、まつぎき荘の指定管理をどこにするかというときに、私はこういうふうにと考えると答えたわけですが、伊豆まつぎき荘の指定管理者を松崎町振興公社に指定する際は、地元からの仕入れや雇用の問題、グリーンツーリズムの拠点施設、町のシンボリックな施設であるというようなことから、総合的に判断して決定させていただいたわけですが。私は、これらができる指定管理は一般財団法人松崎町振興公社しかないと考えておりますが、3年後の指定管理者につきましては、これらの要素や平成26年度の決算、平成27年度の状況を見ながら検討してまいりたいと、こういうふうに答えたわけですが、やっぱりまつぎき荘をこれからどういうふうにしたらいいかということは今年度末に振興公社でいくのか、民営にするのか、町営にするのか、ある程度の結論を出さなければいけないなと思っています。

○3番（長嶋精一君） 今、まつぎき荘のAさんの対応が悪いとか、Aさんの気がきかないとかという段階はもうとうに過ぎているわけです。職員の中には、毎朝一輪挿しの花を摘んで来てくれている人もいます。あるいは真夏のさなかに草刈りをやっている従業員、パートの人、臨時の方もおりました。こういうふうに一生懸命まつぎき荘を立て直そうと思っている人はいるんですね。真面目な方ほどやはり赤字が続くということは肩身が狭い、非常に辛いことだと思っています。是が非でもこれは黒字化しないといけないと私は思っております。

そして、私は、いま質問しておりますが、こうやったら黒字化できるという案は作成しております。売上が横ばい、年間2億5000万円くらいですね、売上が。売上が横ばいであっても利益が出る体質を作らなければいけない。それには思い切った経費削減が必要になるわけです。自分なりの改革案をもっているわけですが、これを各委員と一緒に、町長、副町長、各担当課長と議論をしたいと思っています。そういう機会をぜひもっていただき

いと思いますが、いかがですか。

○町長（齋藤文彦君）　そういう機会は、こっちも望むところですので、ぜひお願いしたいなと思っています。ぜひまつぎ荘を黒字にして元気にしたいなと思っていますので、お願いします。

○3番（長嶋精一君）　私としてみれば、町長の方からぜひそういう機会を作ってくれと・・・作ってくれというよりも、そういうことで話したいと、君らの意見はどうだということを私は望んでおりました。しかし、町長は今おっしゃったように、そういう機会を設けるということですから、喜んで私の意見を述べに行きたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。

次に3つ目、私の要望でございます。沼津方面の病院の件でございますが、先ほど説明がありました。今は、雲見の入谷から6時44分、これしかないわけであります。7時10分の松崎発、沼津方面の病院に行くバスですね。ある地区では、民生委員さんが自分の車でそのバスの出発に合うように松崎まで行ってくださるということを聞いております。このような心優しい人、善意の人に過度に依存しないよう、あくまでも長続きするように循環型福祉小型バスの運行を要望するわけであります。

そして、これに関連して、新しく伊豆地区担当の副知事が誕生したわけでございますが、下田・賀茂地区においていろんな面での連携というものを強化したいと言っております。私は、連携というのは負担の分担、分かち合いということで非常に効果があると思っています。そのような観点から、沼津方面の病院に行く方を対象に松崎、西伊豆方面から行くバスと、それから下田方面からの巡回バス。これを運行し、1市5町で費用を分担するというところで連携を進めていただきたいと思いますけれども、いかがでございますか。

○町長（齋藤文彦君）　今、基本的には、中川、岩科、三浦地区には路線バスが運行しているわけですが、門野地区はないので、門野はどうかということで、課長が一生懸命考えてくれていますので、あとから発表があると思いますけれども、いま考えていることがあります。実は順天堂大学付属病院へ通院バス、直行バスの運行事業の実施に関する協定書というのを2市3町、下田、東伊豆、河津、南伊豆、伊豆市で結んでいて、負担額は均等割、人口割、需要割になっているわけですが、このバスが下賀茂発病院行きが1便ずつ出ているわけですが、これまで6時に出て8時に順天堂病院に着くわけですが、松崎町から行く場合、松崎町から6時5分に出発して、修善寺に行って、修善寺で乗り換え

て長岡へ行って、順天堂病院に行くと、非常に複雑な、大変なことです。これに、もし松崎町が参加して、6時発で、出口に7時29分につきますので、7時36分のバスに乗れますので、それが今できないかということで、課長がいま一生懸命やっていると。それで、もう一つは、順天堂バスへ直接・・・、これは、前のときに土屋清武議員からあったわけですが、松崎町、西伊豆町、伊豆市を通って行くバスができないかということで、いま課長が一生懸命やっていますので、課長の方から詳しい説明をします。

○健康福祉課長（高木和彦君） 平成23年にもこのような直通バスの話がありました。当時は、長岡の病院の直通バスという話がありましたけれども、当時ほかにいろいろ病院があるものですから、そこだけの病院のための直通バスというのはどうかということで、当時はその1日当たりの乗降、乗る方が5～6人程度という数字が出ましたので、再度今回、長嶋議員のご質問を受けて調べ直しをしました。

これは長岡の病院だけでなく、駿東郡にありますがん専門病院ですとか、修善寺ですとか、そういうところの病院を調べてみますと、全体で月282人の方が松崎町から沼津方面への病院に通っています。それ以外に、西伊豆町の方が352人、土肥の方が205人、合わせて840人くらいの方が沼津方面の病院に通っています。

それを単純に病院の開院時間で割ってしまうと、40人。ただ、それに自家用車で行く方が非常に多いものですから、それで単純に計算すると1日10人ということになってしまいます。それですと、直通バスというのは難しいんですけども、ここで一つ考えて、バスで行くという方は高齢者の方が多いものですから、バスは途中でトイレ休憩とかはありません。ですから、トイレ休憩を入れるとか、料金を補助することで安くするとか、そうすれば、見舞いの方ですとか、付添いの方なんかも乗るということになれば、東海バスなんかも採算が取れるような数字が出るかもしれませんので、そこらの数字を私の方で企画書を作って、東海バスさんと西伊豆町、そして伊豆市の方へこれから1市2町で調整しないかということで投げかけをしてありますので、また数字が出てきて、いろいろ方向が決まりましたら、ご報告いたします。

あと、この質問にあった始発の直通バスの関係ですけれども、このご質問をいただいて、2回ほど朝見に行きましたら、乗る方はいなかったです。東海バスに聞きましたら、1人、2人が時々乗る程度ですよということです。その前の時間の循環バスというのは、また別に考えて、先ほどの直通バスが出れば、例えば、1週間5回出ると、運行費もかかります

けれども、月、水、金にして、月曜日は例えば小杉原から出るとか、水曜日は岩科方面から来るとか、金曜日は三浦方面から来るとかとすれば、利便性も高まると思いますので、東海バスの方といろいろ調整をしたいと思います。

○議長（稲葉昭宏君） 時間延長しますか。

○3番（長嶋精一君） 結構です。

○町長（齋藤文彦君） 最初壇上で長嶋議員から意見箱がうんぬんの話がありましたけれども、8月上旬に玄関横にちゃんと置いてありますので、ぜひ帰りに見てください。今までに2通が入っています。

○3番（長嶋精一君） 私の方からは、質問、要望、これで終わります。

○議長（稲葉昭宏君） 以上で長嶋精一君の一般質問を終わります。

午後1時まで休憩します。

（午前11時47分）

---